〈入　選〉

自然は偉大な教育者

坂本　芳明

新団地に息がつまる

朝日新聞の六十年三月のある日、五年生の自殺を取り上げた特集記事に、「新団地に息がつまる」という説明がついた一枚の写真が掲載された。十四階建てのマンションが二百八十七棟も並ぶ横浜の新興団地は壮観なものである。団地内に小学校四校、中学校二校を数えるというから規模の大きさに驚くほかはない。特徴的なのは、樹木が全く見当たらないことである。おそらく、新興団地であるから、緑には気を配っているのであろうが、巨大な空を圧する人工物にはさまれては、緑の樹影は、余りにも小さすぎる存在なのであろう。

マンションから飛び降り自殺した五年生は、毎日、この景色を目にしていた。教師の一言に追いつめられたこの子は、林のごとく居並ぶコンクリートの街で死を選んだ。

記事では、家庭や学校での対人関係にその原因を求めて、自殺に至った経緯をたどっている。この子にとって、唯一の安息の場が図書館であったという。放課後の多くの時間を読書にさいていたとは、やはり特殊というべきだろう。豊かな心の土壌となり、深い思考を育てる読書も、過ぎればマイナス面も考えなければいけない。

教師と友だちとの関係がうまくいかず、鬱積（うっせき）していく胸のうち。マンションから見える狭い空。息苦しいと日記に書きしたためたこの子には、生命の脈動する自然の声が聞こえていたのであろうか。鳥や花、そして虫、緑の木々、それらに囲まれ、友だちと汗まみれになって笑い遊ぶ体験を持っていたのであろうか。太陽の子であったのだろうか。

特集記事では、新興団地と自殺の原因とを結びつけているわけではなかった。

しかし、この一枚の写真は、今日、社会問題となっている子どもたちの精神の荒廃が実は、自然の破壊と深くかかわっているのではないかと考えさせてくれたのである。

小学校教師の私は、子どもの心を、荒れようを、人間関係にその原因を探ってきた。だがそれだけでは不十分のようである。つまり、子どもの置かれている環境が余りにも無機質な人工物にとってかわってきているのではないかと。自然の後退は、潤いの欠如を意味するのではないかと。

いうまでもなく、二十一世紀を担うのは、今の子どもたちである。だが、子どもたちを取り巻く諸状況は多くの問題点を含んでいる。自殺のことといい、家庭内暴力やいじめなどに共通しているのは、生命を大切にするといった人間が本来かねそなえているはずの愛情本能が問われていることである。

戦後の高度経済成長に伴う物質優先の社会。物が豊かになり、（ここでいう物とは、自然の物ではなく人工物を指している）核家族化が進む中で、それらの物は、子どもに惜し気もなく与えられてきた。

幼少時代において大切なのは、兄弟との摩擦であり、葛藤（かっとう）である。忍耐することや、手加減を体を通して知っていくことは、社会生活のルールを身につけていく基

盤となるのだ。親や教師が「友だちと仲良くせよ、困っている時は思いやりの心を」と道徳的なことを叫んでも、それらは知識であって、知恵ではないのである。体を通さないものは、血や肉とはなり得ない。幼少時にお利口さんであった子が青年期になってキバをむくとは、幼少時の体験の大切さを物語っている。

いじめや、暴力に走る子は、幼少時に生命を体で感じる経験に欠けていたのかもしれない。しかし、今の子どもたちが、生命をいとしむ心に欠けているとは決して思わない。

アサガオが泣いている

日々、子どもの言動に接している私は、外界に触れる子どもの新鮮な目に驚かされる。小学校低学年を受け持ち、春を見つけようと学校の回りをひと巡りしただけでも、タンポポが咲いている、イヌフグリだ、やれ、固い雪をつき破ってチューリップの芽がとんがっていた、と逐一、私に報告に来る。

一年生の理科の学習では、アサガオの種をひとり一鉢に植える。私がもったいぶって、ひと粒の種を示し、「これはね、不思議な不思議な生命（いのち）というものが入っている宝物なんだよ」と言うと、子どもの目はきらきらと輝いてくる。一粒の種を小さな手のひらにのせ、おそるおそる鉢に植えるのである。芽が出るまでは、朝に夕なに鉢をのぞき込み、雨の日でも水をやる子がいる。

一度、教室に置いてあった芽の出たばかりの鉢がひっくり返ったことがあった。大騒ぎである。その時である、ひとりの子が「先生、アサガオが泣いてる！」と叫んだ。子どもたちの目がいっせいに注がれた。見ると、折れた茎から水滴が玉のように輝いていた。

根から水分を吸い上げているからというのは、余りにも科学的な説明である。この子たちの、水滴を涙と見、アサガオの傷みを感じた心の叫びこそ、命あるものをいとしむ原点であろうと思う。

自然愛護というのには、小さ過ぎる出来事である。しかし、このささやかな生命を大切にする心を失って、どうして、北海道の、そして地球規模の自然を語ることができよう。

純真な子どもたちは、命ある花や虫や小動物に鋭敏に心を動かす。それがなぜ、成長とともに、心が荒廃し、時には、他人の心を踏みにじり、命を軽んずるようになっていくのであろうか。

自然に学ぶ

思いやりや、やさしさは、言葉による教育よりも、幼少時においては、体験を通して確かなものとなることは、先にも述べた。アサガオの傷みを自分の心の傷みと感じたのは、自分自身が育てたからである。通りすがりの花壇のチューリップが折れていたとしよう。そして、そこに、「花を大切にしましょう」という看板があったとしよう。それでも子どもたちが、そのチューリップに注意を向けるかどうかは、はなはだ疑問である。

アサガオを植えたり、理科で春を見つけに歩くことも、直接、自分の目や手で自然に触れ、発見しているから、感動はみずみずしく、確かなものとなっていくのだ。

幼少時において、より多くの人間と触れ合い、愛情に支えられながらも葛藤をくり返す中で、社会生活のルールを知り、生きる強さを身につけていくように、自然とのかかわりも、直接体験こそ人間を大きく育てていく基盤となっているのではないだろうか。

しかし、今日、特に都会の子の、自然との直接の交わりは、きわめて限られてきているのである。カブトムシ、キリギリスといった虫でさえ、デパートで買ってきて、本の通りに育てるものとなっている。まずもって、昆虫を捕える場所がないのである。児童公園といえば、人工の遊具が占め、緑の公園といえば、必ず、次のような警句が張り出される。

「みんなの公園です。木に登ってはいけません。枝を折ってはいけません。芝生では遊ばないようにしましょう」

このことは、家庭や学校で、「友だちとけんかはしないんだよ。みんなと仲良くするんだよ」と、愛情や生命の尊さを知識で教え込もうとする昨今の状況とよく似ていないだろうか。

もちろん、自然の愛護といい、いたわり合いといい、子どもたちに十分、言葉による教育は大切である。神なき時代と言われ、戦後の父性喪失はきびしく反省しなければならない。しかし、同時に、子どもには、けんかがあってよいし、自然とのやんちゃなかかわりがあってよいはずである。というより、なければいけないのではないか。

今の子どもたちは、昔の子どもたちと比べると素直な紳士である。枝は折らず、木にも登らず、生き物は大切にと、すぐ口にする。キタキツネもクマもエゾシカも、野生動物としてではなく、まるでぬいぐるみであるかのように眺める。実際に、草むらで虫を追いかけたり、土をほじくり返すといったことを知らない子が多いのである。手を汚す子が少ない。

そんな子がやがて大きくなるとどうなるのだろう。山に出かける時には、防虫スプレーや、カットバンを持参し、カセットイヤホンを耳につけて、都会の自分の城をそのまま持ち込んでいくのである。鳥の声や川のせせらぎ、あるいは人知れず咲く野の花、それらはすべて、子どもの時には体験しなかった退屈きわまりないものだからだ。

だから、キタキツネがエキノコックス症の病原体を媒介するといっては顔をしかめ、ヒグマが人を襲ったといってはおののくのである。

あるがままの自然はきびしく、そして魅惑的である。都会に囲われた緑の公園は、本来の自然ではないのである。都会の中にこそ雑木林がほしい。そして、子どもに開放してほしい。木によじ登り、木の肌のぬくもりを感じ、時には、木によっては、もろい枝と、しなやかに強い枝があることを知っていく。また、樹皮によっては、とげとなることも知っていく。虫に刺されもしよう。そういう体験を通して、自然は、様々な顔を持っていることを学んでいくのである。

自然は偉大な教育者である。子どもは、自然の中では狩猟者となり、探検家となり、科学者となっていくのだ。ある時は、自然から様々なしっぺ返しを受けて泣かされることもあろう。

強い体と豊かな心は、自然との交わりの中ではぐくまれるといっても過言であるまい。しかも、自然の中での遊びは、必ず、友だちとの結びつきを強くする。体ごと自然と戯れた子は、自然というものに、意識しないにもかかわらず、畏敬の念を抱くようになるであろう。やがて、青年期に至って、自然は精神との深いかかわりを持ってくるであろう。

私たちは、緑といったやさしいイメージから自然を感覚的にとらえがちであるが、畏敬の念といい、精神とのかかわりで考える場合は、それだけでは不十分である。つまり、人智を超えた自然の深さや恐ろしさにも目を向けなければいけない。畏み敬うとは、自然の前にあっては、いかに人間が小さ過ぎる存在であるかを、謙虚に受けとめる心を言うのであろう。

自然の征服が実は、人間が自分自身を侵害しているという矛盾。冒頭に掲げた「新団地に息がつまる」とは、人間の奢りを戒める言葉と受け止めなければなるまい。

子どもは、子どもなりに大自然のきびしい一面を受け止めることができるのである。

海が襲ってきた

夏休みあけの子どもたちの顔は、日焼けしてたくましい。太陽の子という言葉がぴったりである。黒い顔が、海や山で過ごした楽しさを物語っている。特に、最近は、青少年の自然の家や、キャンプ地で過ごす子が多くなってきており、そこでの体験が、子どもをひと回りも、ふた回りも大きくさせているようだ。子どもは、環境に驚くほど早く順応する。

たとえば、五年生の宿泊学習でキャンプ生活をするが、わずか二日間というのに、親や教師の心配をよそに、どの子も野性にかえったようなたくましさを発揮する。今の子が決してひ弱なのではなく、自然との接触をさせてないからなのである。わずか二日間でさえ、このように変わる子どもたち。日常的に体を投げ出せる自然がほしいと主張するのも、こういう子どもたちを見ているからである。

夏休みが終わって、海や山で過ごした子どもたちの話は、いくら聞いてもあきない。二年生を受け持った時のことだ。プールより海がずっと楽しいと、私に報告した子がいた。全く泳げなかったその子は、貝をとりたいために潜ろうとしたら、体が浮いちゃって、手足をバタバタさせているうちに泳げちゃったと笑って報告した。

別の子は、「ぼくね、海に襲われたんだよ」と、海の恐ろしさを表現した。父母懇談会でも、そのことがしきりと話題となったが、親の話によると、波高いその日、目の前で、おとなの人が水死したという。

海が襲ってくる！と思わず声にした子は、プールでは体験できない自然への畏怖の念を全身で悟ったのだ。

神なき時代ともいわれ、それが精神の荒廃を招いているとも言われる今日、偉大な自然のふところへ、子どもを帰してあげたいものである。

子どもたちの休日の過ごし方はどうかというと、低学年の多くは、デパートにお買い物とか、レストランで食事をしたとか、遊園地へ行ったというたぐいである。高学年になってくると、父親の年代が高くなるせいか、父親はゴルフへ、子どもたちは、自転車などで何となく過ごすという子が目立ってくる。

さいわい、私の勤務する円山小学校の場合、校下に円山公園という自然に恵まれているせいもあって、家族で散策やスポーツという話も聞く。

私自身、ひとつの経験を思い出す。札幌近郊の牧場に、催し物があるというので家族で出かけたが、わが子らは、ぬいぐるみの人形には目もくれず、広い草原で野球帽を片手に、トンボを追いかけ回し、楽しい楽しいと休もうともしないのである。秋の日に汗が光る笑顔はさわやかであった。

私はと言えば、寝転んで、ああ、空はこんなに広かったのかと驚き、いつであったか少年のころ、こうして空を行く雲を眺めたことがあったと、思い起こしたのであった。

子どもには、鉄の遊具は不要である。タンポポの群れ咲く広場があり、自然のままの小川があり、そして、秘密めいた雑木林があれば十分である。

「新団地に息がつまる」と言って自殺した横浜の子には、この広い草原と、悠々とした雲を遊ばす広くて高い空があったのだろうか。

わが北海道には、青い空があり、深い森があり、そして先人の血と汗によって開かれた豊かな大地が広がっている。しかも、日本のどの地よりも過酷な冬があり、いっせいに命がふき出す百花繚乱の春がある。

では、私たちは、この北国の自然とどのようにかかわっていったらよいのだろうか。

自然との対話

人の発達段階と自然とのかかわりをテーマにした研究を余り目にしたことはない。自然を守り育てる時、自然と人間を主題にした研究は、ぜひとも必要であろう。

ただ、私なりに感じていることをまとめてみると次のようになろうか。

幼少時において、五感を通して血となり肉となった自然との体験は、青年期を迎えるに及んで、精神と深いかかわりを持つのではないかと。人の発達段階において、自然は様々な教化をもたらすのではないかと。それは、個性に応じて、ある人には、自然とのかかわりで美術や文学といった芸術への目を開き、また、ある人には自然科学への道を開き、また、ある人には、自然と直接交わるスポーツへと可能性を広げてくれるのではないかと。

自然の中に趣味を見いだす人も、そこには、自然によって自分が生かされているということ、つまり、自然の中に人生を投影し、自己を見つめているのであろう。

自然と対話ができる人、それが、自然を守り育てる資格のある人といえるのではないか。

これらの諸条件を満たしているのは、第一次産業に従事している人々であろう。農、林、水産業それぞれに自然のきびしさと戦い、また、その恵みに感謝しているのだ。私どもが生きていく基本的な条件は、すべて自然が負っている。ところが、食糧の基地が自然とのかかわりにあることをともすれば忘れがちになり、また、自然の場を単なるレジャーの地として見過ごしがちである。

人間生存のための食糧生産の場としての自然。まず、それを忘れてはなるまい。

一方で、自然は、レクリエーション（遊びではなく再生）の場であり、思索の場でなければなるまい。ヨーロッパで森と言えば、散策の場であり、散策は、すなわち、思索を意味している。

日本では、単なる思索の場を超えて、深い森は、宗教的な意味あいすらおびていて、神社仏閣が、静寂な森に包まれていることは、いかに自然の恩恵が大きいかを物語るものであろう。

しかし、今日、「自然」といえば、多くは「観光地」を意味し、自然との対話より、自然の中で心を解放するといった物見遊山の傾向が強いのではないか。観光化が自然との対話を失わせ、単なるレジャー基地とならなければよいのだが。

原始荒寥の自然「北海道」

ここで、ひとりの歌人を紹介しよう。北海道の自然に魅せられ、北海道を歌い上げた、故渡辺義孝氏である（**注1**）。二十年前に発行された氏の歌集「北海道の歌」の序文を、少し長くなるが次に紹介しよう。

「北海道は詩の国である。原始自然の赤裸々な慟哭の声である。それは絵よりも文章

よりもより純粋な詩の世界である。近年、北海道の自然美にあこがれて、遊杖をひく人がおびただしい数にのぼっているが、そのすべての人が本州その他に見られない北海道特有の風趣に強く胸打たれて感動する。（中略）

北海道の自然こそ、真に文字通りの自然の名に価するもので、本州その他の景観はすでに人為によってゆがめられ、破壊されて、も早自然の名に価しない。そこへ行くと、北海道はあまりにも人工の加わらない原始荒寥の自然であって、そこに北海道の魅力がある。そこには地象を形成した創世の熔岩のくすぶりがあり、北溟の鬼哭啾々の怨嗟の声がある。また、生命始源の孤独のかなしみがある。原始鮮紅にもゆるオホーツク海の夕焼け、壮大なるロマンの激情奔騰する襟裳岬、ガスの中にぬれてすゝり泣く原生の花、神秘凄婉の聖女摩周湖、また刻裂峻峭の層雲峡、それはすべて日本国土の中に自然の美を最後の城塞のように原始のまゝ残されている。（後略）」

長々と引用したのは、いうまでもなく、今日、北海道も原始自然の姿が急速に失われつつあるからだ。

私たち北海道に住む者にとって、本州に追いつき追いこせという開発が至上命令であった。今日の豊かな繁栄は、先人の原始自然との戦いや、犠牲によってあることを忘れてはなるまい。だが、二十一世紀に向けては、渡辺氏の言うように、あるがままの自然こそ財産であるという発想の転換をはからなければならないであろう。観光化という名目のために、人に都合よいように手を加えていくことは慎重であらねばならないだろう。

渡辺氏は、摩周湖をこう歌う。

不浄なる念ひを洗ふ水ならず
珠玉と凝る
湖の蒼みは　（注2）

この美しき湖の水は、わが心の中に汚らわしい思いがあれば来て浄めるという水ではなく、神聖なる美そのもの、玉と凝った神秘そのものの美しきものの極みである、と歌っているのである。

摩周湖が、湖畔まで開発され、ボートが浮かび、店が立ち並んでいたならば、このような歌がうまれていたであろうか。いまだに、湖畔まで開発されない湖を持つ私たちは、本州にはないすばらしさを誇りにしたいものである。

北海道の自然を守るとは、言いかえれば、箱庭のように造りかえないことを鉄則にすることだ。素顔の北海道をとらえて、渡辺氏はこうも歌う。

黒きものは大地なり
この薄明の夕空のもといづく行かむぞ　（注3）

音威子府から、稚内への途中である。目にうつるもっとも黒いところは大地である。その上のうす明りは空である。この寥々たる、広野を私はどこへ行こうとするのであろう。そう歌う氏には、きびしい自然との対話がある。

私どもに、氏のようなきびしい対話は無理としても、原始荒寥の自然を守り、見つめていきたいものだ。

それにしても、今日の乗り物に代表されるスピード化は、じっくりと腰をすえ、自然と対話するゆとりを奪ってしまった。また、自然との直接の対話で自然を知るのではなく、テレビやグラビア雑誌で自然を自分のものとしてしまう。近頃の映像は美しい。テレビや写真集に映し出された自然のストップモーションは、絵画や文学以上に直接的であり人を引きつける。

私たちは、それが自然本来の姿と錯覚し、それを求めて奥へ奥へと車を駆り立てる。そうして都会なみの雑踏の中で、こんなはずではなかったと、垣間見て、ただ見たという既成事実が大切であるかのように、足早に、次の地へ移動していく。商品化された自然とは実に悲しいものである。

北海道の名勝地もよいが、近郊でもよし、自然歩道を家族で歩き、あいさつを交わし合う、あの心和む触れ合いの方を子どもに体験させたい。もっと言うならば、ほんの足もとにある自然の一木一草にも目を向けていく細やかな目がほしいと思う。

草むら

一昨年の新学期のことであった。私の学級は校舎の端となり、緑の円山が見渡せない位置になってしまった。そこは、別棟の校舎にも囲まれ、視界はさえぎられ、はなはだ不満な場所であった。

ところがである。窓の外の狭い一角に、教室の住人である私と子どもたちは注目しだしたのだ。

まず雑草が青い芽を吹き出した。続いて数本の桜の花が開き、学年園では菜の花が春の風に揺れるようになった。

すると、スズメが飛んで来るようになった。どうやら草の繁みに頭をつっこんでは、虫をついばんでいるらしい。菜の花にはモンシロチョウが舞い、盛んに卵を産みつけていく。そのうちにアブラナの種を求めて、黄色と黒の二色の鮮やかな小鳥がつがいでやってきた。野鳥図鑑で調べたが、名前は、わからずじまいだった。

めずらしいことに、朝のうちは、校舎の軒下に営巣しているイワツバメまでもが、草地を歩いて虫をさがしているのである。子どもたちは、「飛びながら虫をとるツバメが地面を歩くなんてめずらしいね」と、したり顔で話してくれた。

見晴らしの決してよくない、この小さな土地は、実に自然の縮図であり、緑の草が生命をはぐくんでいたのだ。私自身、そのことを発見した喜びをもって、子どもたちに話したのである。

ここでもう一度、あの自殺した子どもがマンションから目にしていた景色を想起してみよう。高層マンションの乾いた壁の群れ。私の教室の場合も、視野に立ちはだかったのは校舎の壁であった。だが、わずかの緑であっても、そこには自然界の輪廻(りんね)があり、子どもたちは、窓の外の季節の移ろいを敏感に見てとっていったのである。

二十一世紀に生きる子どもたち。私は、私なりに自然の大切さを述べてきたが、では、具体的にどう守り育てるのかといった肝心な点については、明確な主張にまで至っていない。

しかし、教職にあるうちは、子どもたちとともに自然と深くかかわり、見つめ、自然のすばらしさに目を開いていくよう努力したいと思う。一木一草にも目を向けていきたいと思うし、同時に、宇宙からみた地球がどんなに美しいものか、地球そのものが生命体であり、人間は、その中で生かされていること、人間が奢り、高ぶり、自然を侮ってはいけないことなどを子どもとともに考えていきたいと思う。

すでに、地球規模で自然を考えていかなければならない時が来ていると言ってもよいだろう。

「自然の中に生きていると心が和む。この地球の自然なしには人間は生きてはいけない。というより、人間も地球の一部なのだ。地球を離れては、人間は呼吸することすらできない。宇宙人が地球にやってきたらエイリアンだが宇宙における地球人もまたエイリアンなのだよ。地球以外にいきどころがないのが地球人だ」（立花隆「宇宙からの帰還」中央公論社）

宇宙飛行士の言葉に代表される巨視的な自然のとらえ、そして、「アサガオが泣いてる！」と叫んだ子どもの微視的なとらえ。

二十一世紀に向けて、私たちは両者の視点で自然と人間のかかわりを考えていきたいものだ。子どもたちの一鉢のアサガオが、一本の植樹となり、足もとの一木一草への興味関心が森林への興味関心とつながっていく。やがては、北海道の、日本の、そして地球全体の緑を真剣に考えていく子どもたち。

私は、子どもたちにそういう夢を託している。緑を育てるとは命を育てることなのだから。

注1　渡辺義孝（明治三十年―昭和五十八年、短歌「あぢさゐ」誌主宰）

注2　弟子屈町に歌碑として建立されている。

注3　洞爺湖畔に歌碑として建立されている。